

諸家の兩展覽會談

黒田畫伯談片

之は黒田畫伯の某氏と對談の一節であるが、同畫伯の閱覽を經る暇がなかつたから、文責全然記者にあることを斷る。

新聞では、今年は白馬會と太平洋畫會とが同時に開いたので、競争をやつてゐる様に云つてゐるが、そんな譯ではない。勿論技術上の競争は面白いことではあるが、今年はそんな積はちつともなかつた。併し批評家などが兩方を比較して、其主義の異つた處を見るのには便利であらう、兩方の特色を見出すのに都合が好いから。

兩方の展覽會を見て、最も著しく違ふ點は、太平洋畫會の方には、纏つた畫——畫になつた畫が多い、太平洋畫會の方では、仕上げない畫をば畫と見ない様な傾が見える、それで畫に纏めたのが多い。白馬會の方では、畫は必しも仕上げたものでなくてはならぬとは見做さない。それだから、太平洋畫會のゝに比べると畫になつてゐない様なものが多いかも知れぬ。我々の方では、畫は必しも纏めてなくても、光なり、色なり、形なり手法なりに、研究がしてあつて、面白いところがあれば探るのである、小さな板つべらに描きかけたものでも、自然なり人間なりの感興が出て居れば探るのである。そこが、双方の、畫と云ふものに對する考や主義の違ふところである。

それから白馬會の畫に對して、色が白つぽいと云ふ評があつたが、白つぽからうが、紫であらうが、兎も角も、光や色と云ふものに付いては研究をして居る積である。色なども大分異がふ。從來日本では主にも茶がかゝつた色

を澁いとか高雅だとか見て居るから、そんな色を好んで使ふ者もある。併し畫の面白味は茶色だとか紫色だとか、そんな事にはちつとも關係はないのである。

〔『美術新報』九十八明治四三年六月一日〕